

初級日本語学習者の音読音声に見られる特徴 —予備調査の音響分析結果より—

金 珠 (大阪大学)

【問題】

- 1) 初級日本語学習者は、文字で書かれた日本語を声に出して読む場合、自分の発音が聞き手にどのように聞こえるか、どう評価されるかさほど意識しないことがある。
- 2) 日本語学習者のゼミや研究会での発表（原稿の読み上げ音声）がわかりにくく、音読に自然なリズムが欠けている。
- 3) 学習者の音読をわかりにくいと感じさせる原因の一つは区切り方が不適切であること（石崎 2004）。
- 4) 日本語のリーディング練習において、「聞き手を意識した音読」が必要である。しかし、音読指導は難しいという考え方があるため、音声指導を重視した音読指導があまり行われていない。音読には工夫された理論的な指導が必要である。

【目的】

- 1) 初級日本語学習者にとっての効果的な音読指導方法を探る。
- 2) 本発表では音響分析の手法を用いて初級学習者の音読の特徴を分析し、音読音声の実態を記述する。

【調査方法】

- 1) 調査の協力者：A 大学初級日本語学習者 10 名（タイ：2名、インドネシア：3名、台湾：2名、ベトナム：1名、ルーマニア：2名）
- 2) 調査時期：2021 年 10 月
- 3) 音読の材料文：「かさじぞう」（音読の録音を実施する前に、読解練習を行った）
- 4) 録音手順：リニア PCM レコーダーまたはスマートフォンで録音し、Praat で分析
- 5) 分析方法：①発話速度 ②ポーズの位置・数・長さの面を中心に行った。
- 6) 日本語母語話者の音声：奈良県出身の 40 代男性



むかしむかし 6	山の中に 6	おじいさんとおばあさんが住んでいました 19	文末ポーズ 3
958.6ms	ポーズ	919.5ms	ポーズ
		2372.9ms	

【結果 1】：発話速度

母語話者：132.1ms/モーラ

（1 秒間、7~8 モーラを発音する。）

学習者：134.5~350ms/モーラ

（1 秒間、3~7 モーラを発音する。）

速度のばらつき度合い：発話速度平均値の標準偏差の幅が広がった。（学習者の発話速度が速かったり、遅かったりして一定ではなかった。）

被験者	① 発話時間 (ポーズなし、ms)	② モーラ数	③ 発話速度 (ms/モーラ)	④ 標準偏差 (SD)
学習者 1	30323.1	200	151.6	35
学習者 2	42101.1	200	210.5	68
学習者 3	34719.4	200	173.6	45
学習者 4	26898.8	200	134.5	26
学習者 5	33473.0	200	167.4	39
学習者 6	69996.4	200	350.0	172
学習者 7	32910.4	200	164.6	26
学習者 8	44528.3	200	222.6	44
学習者 9	33521.3	200	167.6	84
学習者 10	41899.0	200	209.5	41
母語話者	26421.2	200	132.1	12

【結果 2】：ポーズの位置

母語話者：文末位置、フレーズ後位置

学習者：

文末位置：学習者全員がポーズを置くことが観察できた。

フレーズ後位置：母語話者と同様の位置にポーズを置くこともあれば、母語話者が置く位置にポーズを置かない（むかしむかしやまのなかにおじいさんと…）こともある。

その他の位置：学習者が述語の前、接続詞や助詞の後（「/」）に頻りにポーズを置くことがわかった。また、文節内にもポーズを置く例が三つあった（「/」）。

No.	発話の一まとまり（フレーズもしくは文）	ポーズの位置
1	むかしむかし、	フレーズ後
2	やまのなか	フレーズ後
3	おじいさんとおばあさんが住んでいました。	文末
4	おじいさんとおばあさんは	フレーズ後
5	うちでかさをわくっていました。	文末
6	あしたはおしよがつです。	文末
7	あたらしいしがはじまります。	文末
8	でもおじいさんとおばあさんは	フレーズ後
9	おかねがなかったから、	フレーズ後
10	おしよがつ	フレーズ後
11	おもちもありませんでした。	文末
12	ふたりはかさをうって、	フレーズ後
13	おもちをかうつもりでした。	文末
14	おじいさんはかさををもって、	フレーズ後
15	まちにうりにいきました。	文末
16	でもだれもかさをかいませんでした。	文末
17	おじいさんはかなくなりました。	文末
合計	17文(文末ポーズ：8箇所、フレーズ後のポーズ：8箇所)	

【結果 3】：ポーズの数

母語話者：16 箇所（文末ポーズ：8 箇所、フレーズ後のポーズ：8 箇所）

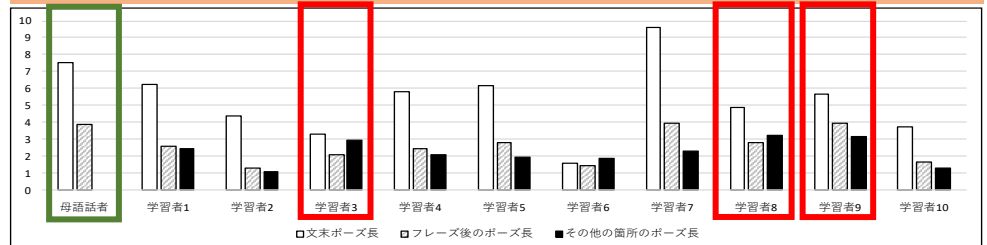
学習者：15 箇所~34 箇所（文末ポーズ：8 箇所、フレーズ後のポーズ：3~8 箇所、その他：3~18 箇所）

ポーズの位置	母語話者	学習者1	学習者2	学習者3	学習者4	学習者5	学習者6	学習者7	学習者8	学習者9	学習者10
文末	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
フレーズ後	8	3	6	8	5	5	6	7	7	7	8
その他の箇所	0	4	8	16	6	3	11	13	16	9	18
ポーズの数（合計）	16	15	22	32	19	16	25	28	31	24	34

【結果 4】：ポーズの長さ

母語話者：文末ポーズ長は 7.5 モーラであるのに対し、フレーズ後のポーズ長は 3.9 モーラである。

学習者：文末とフレーズ後のポーズ長の差が極めて小さいことがわかった。



【考察とまとめ】

- 1) 学習者の発話速度が一定ではない。学習者間の差が大きく、学習者内にも大きなばらつきがある。音声処理（音韻処理）スピードがまちまちであり、発話速度が不安定である。初級段階からモーラの等時性を強調し、発話速度を重視した読み方の指導が大切である。2) ポーズの置く位置と長さがわからない。学習者が音読する際に、文末にポーズを置くが、文中にどこにポーズを置くべきかをあまり意識していないことが明らかとなった。これは、日本語の文字列の分節能力が原因であると考えている。語の一部を独立要素として認識してしまい、一語一語読んでしまう。教師が音読させる前に、学習者と共に「読む際の一まとまり」を視覚的に表示する等の指導が必要である。3) 今後はさらに多くの学習者の音読データを集めて音声分析し、本調査で見られた傾向の信憑性や問題点を解決するための指導法について実践的に検証する。

【参考文献】

- 石崎晶子 (2005) 「日本語の音読において学習者はどのようにポーズをおくか—英語・フランス語・中国語・韓国語を母語とする学習者と日本語母語話者の比較—」『世界の日本語教育』Vol.15, pp.75-89
- 山中都 (2007) 「テキスト音読に見られる発音上の問題点—区切りを中心に—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.14, No.1, pp.14-16